

# 07

## なぜボランティアが必要なの？

災害ボランティアへの期待がますます高まっています。役割をみていきます。

### ① フットワークの軽さがボランティアの長所

災害時には、被災した市区町村に災害対策本部が設置され、策定していた計画に基づいて人命救助やライフラインの復旧、被災者への補償や住まい対策がおこなわれます。これが「公助」です。ただし、災害時には「想定外」がたくさん発生します。「公助」では、計画のなかになかった「想定外」に対しては臨機応変な対応が難しいことがあります。

写真を見てください。バケツがあらかじめ策定されていた「公助」で、バケツのなかの水が災害です。いざ水を入れてみる、つまり発災するといくつもの想定外の穴から水が漏れ出しています。いち早くこの穴を埋めるには、その場で判断しながら動く臨機応変な対応が必要です。災害ボランティアはあらかじめ決められた計画やルールがある「仕事」ではなく、必要に応じて動く「自主的」な活動が基本です。だからこそ、こういった「公助」では対応しきれない穴や被災者の困りごと（ニーズ）を素早く見つけ、対処することが可能です。フットワークの軽さが、ボランティアの大きな長所のひとつです。



### ② 「泥を見る」ではなく「人を見る」

宮城県石巻市は、東日本大震災で大きな津波被害を受けた被災地です。商店街が広がる町の中心部では、震災から1カ月経っても、道路いっばいに泥水にまみれた家財や商売道具が山積みになっていました。周辺住民のみなさんからは、「ここで生活や商売を続けるのは無理だ」という言葉もたくさん耳にしました。

水害時に災害ボランティアがおこなう作業内容で最もマンパワーが必要となるのが、家屋やお店の清掃、泥出し作業です。石巻市でも毎日たくさんのボランティアが泥出しや清掃活動をおこないました。すると、「きれいになっていく街の姿と、毎日汗水流して掃除するボランティアを見て、もう一度この街でやってみようという気になった」と少しずつお店が再開し始めました。

清掃、泥出し作業では、いち早く片付けが進むよう作業の効率を上げることも必要ですが、住民の気持ちに寄り添った活動が、被災者の精神的な励みにもつながっていきます。



石巻市中央市街地の様子(2011年4月)



石巻市中央市街地の様子(2011年7月)

### ③ 被災者同士では話せないことがある

災害は、一瞬で多くの大切なものを奪い去ってしまいます。その事実を受け止め、乗り越えようとする被災者の苦しみは、想像を絶するものでしょう。苦しみを誰かと分かち合いたいと思っても、心の傷をえぐり、苦しみを追体験するような会話は、被災者同士ではなかなかできないこともあります。

そんな被災者が、私たちボランティアに自らの被災体験や失ったものへの思いを語ってくることがあります。見ず知らずの他人だからこそ話せることなのかもしれません。被災者の苦しみや悲しみをボランティアが解決することはできないでしょう。それでも、誰かに話すことによって被災者自身が自らの体験を受け入れようとしているのかもしれません。

ボランティアにとって重要なのは、話しを無理に聞き出したり答えを出すことではありません。被災者のペースに合わせて、きちんと耳を傾け寄り添う姿勢を大切にしましょう。



### ④ 高まる災害ボランティアへの期待

発災時に活躍する組織・機関といえば、消防や警察、自衛隊、医療機関などがすぐに頭に浮かんでくると思います。指定公共機関（16 ページ参照）を加えた「公助」の動きは、いわば支援の大動脈です。ただ、身体の隅々まで血を巡らせるためには、きめ細かい毛細血管が必要です。被災地の現場で、この毛細血管の役割を果たすのが、地域での支え合いや災害ボランティアといった「共助」の動きです。

災害ボランティアの活動が注目されるようになったのは、1995 年の阪神・淡路大震災でのことです。「ボランティア元年」と呼ばれ、社会現象にもなりました。当時はボランティアを受け入れる組織や仕組みもなく、その場で試行錯誤しながら被災者のニーズに対応していました。その後も大きな災害が起きるたびに、被災地にボランティアが集まるのが一般的になりました。もっと効果的な支援の受け皿をつくろうと、被災地の社会福祉協議会が「災害ボランティアセンター」（40 ページ参照）の運営を担う仕組みが広がり、ボランティアを組織化して継続的な活動ができるようにと NPO 法ができました。

国レベルで日本の災害対策を検討する内閣府（防災担当）でも、「共助」の担い手として NPO や災害ボランティアへの期待が高まっているようです。ボランティアの主体も社会福祉協議会や NPO だけでなく、企業が社員のボランティアを派遣したり（77 ページ参照）、大学がボランティアステーションを設置して学生のボランティア活動をサポートしたりとさまざまな取り組みがおこなわれています。そして、それぞれの主体をネットワークする連携・協働の仕組みづくりも進んでいます。これらの一連の動きは誰が指示したわけでもなく、過去の災害支援の現場を経験した人たちが自発的に作り出してきました。

古くから地域における防災・減災を担ってきた消防団や自主防災組織は、いまや少子高齢化という大きな課題に直面しています。阪神・淡路大震災以降、災害の現場を経験するたびに成長してきた災害ボランティアによる「共助」の仕組みは、現在の日本にとって新しいセーフティネットのひとつになったといっても過言ではないでしょう。

# 09

## ボランティアへの参加方法

自分に合った災害ボランティアの募集を探そう！

### ① 社会福祉協議会と災害ボランティアセンター



熊本市災害ボランティアセンターの様子

「家族や知り合いが被災した」となれば、直接物資を送ったり、手伝いに行ったりするかもしれません。これも、被災者のために自主的に活動するという意味では立派な災害ボランティアです。ただし、この本で紹介する災害ボランティアとは、特定の被災者と直接の面識がなくても、ある団体や組織を介してボランティアの募集に応じ、活動するケースを前提としています。

一般的な参加方法は、被災地の市区町村に立ち上がる「災害ボランティアセンター」に登録することです。災害ボランティアセンターは、一部の市区

町村では行政やNPO/NGOが運営することもあります。多くは社会福祉協議会（社協）が運営を担います。社会福祉協議会は、地域の社会福祉活動を推進することを目的に、それぞれの都道府県、市区町村で活動する民間組織です。災害対応を専門とするわけではありませんが、日頃から高齢者の見守りボランティアや地域での活動をおこなっているため、発災時にもそのノウハウを応用して災害ボランティアセンターの運営を担う仕組みが全国的に広がるようになりました。

災害ボランティアセンターは、発災後、被害状況によって「ひと」の応援が必要と判断すれば、数日間の準備を経てホームページやFacebookなどのSNSを通じてボランティアの募集要項を発表します。近隣地域へは、チラシなどで知らせることもあります。センターは市区町村ごとに別々に設置されるので、インターネットの検索サイトで「被災地の市区町村名、社会福祉協議会、ボランティア」などのキーワードで検索してください。募集要項には、その日の集合時間や場所、想定される活動内容、持ちものなどが記載されているので、参加する前によく読んで確認してください。

### ② 移動手段を確保しよう！

被災地の災害ボランティアセンターまでは、指定された集合時間・場所に、あなた個人で移動することになります。交通費や現地での食費などは、ボランティア自身が負担するのが原則です。特に、遠方からの参加であれば、現地の地理もわからず道に迷ったり、被害によって公共交通機関が止まっていることもあるので、きちんと調べてから、時間に余裕を持って移動するようにしましょう。

現地での移動にも便利なので自家用車を利用する人もいますが、事前の確認をお勧めします。被災地では、駐車場の不足や、渋滞が起こりがちです。停電で信号が停止していたり、道路標識がなくなっていることもあります。雪かきのボランティアに参加するばあいには、当然雪道の運転でしょう。ふだんの運転と勝手が違うかもしれません。ほかの個人ボランティアも乗せて現地での移動に活用しようとの心がけは立派ですが、車内が泥だらけになることも覚悟しておいてください。

### ③ 災害ボランティアの1日

さあ、災害ボランティアセンターに到着しました。そこからどのように活動するのでしょうか？ 右ページの図を参考に、一般的な災害ボランティアの1日の活動の流れを見てみましょう。

災害ボランティアセンターの設置場所は、屋外テントの場合も、施設内の場合もあります。個人参加のボランティアは、受付をすませるとチームを組み、その日の活動を割り当ててもらい、必要な資機材を持って作業の現場に向かいます。作業現場まで距離がある場合には、自家用車に乗り合わせたり送迎のバスで移動することもあります。作業現場に到着したら依頼者と作業内容の確認をします。無理せず、適度に休憩をはさみながら活動しましょう。作業終了後は、一度災害ボランティアセンターに戻って資機材の返却や作業の報告などをおこないます。

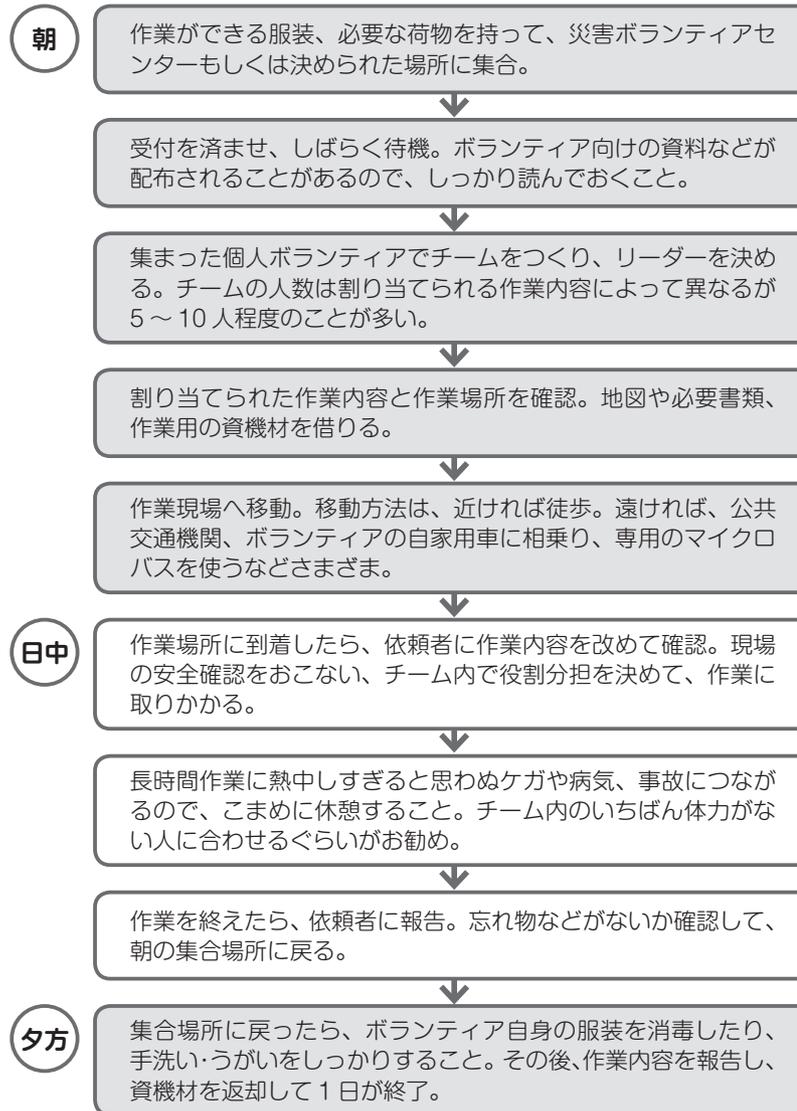
この1日の流れは参加先によって違うので、参加した先のルールに従ってください。また、必要以上のボランティアが集まればその日に割り振られる作業がなかったり、悪天候のため作業が中止になることもあります。ご紹介したのはひとつの目安だと思って、現場で臨機応変に対応しましょう。

### ④ NPO・NGO、専門ボランティア

NPO/NGO や専門職のグループが被災地で活動するケースも増えてきました。災害支援そのものを専門とするNPO/NGOの数はそれほど多くありませんが、医療や介護、子どもや教育、街づくりなどそれぞれの専門分野を持っています。「公助」では十分な対応ができないが、素人の個人ボランティアには作業が難しい知識やスキルが必要な場面で力を発揮します。

災害ボランティアセンターは、あまり高度な知識やスキルを必要とする作業は請け負いません。「医師・看護師免許がある」「語学力を活かしたい」「被災したペットや動物を助きたい」「重機が運転できる」など、自分の資格やスキルを活かして災害ボランティアに参加したいと思っている人は、日頃からその専門分野に精通しているNPO/NGOの会員になっておいたり、職能・業界団体からの情報にアンテナを張っておくことをお勧めします。

### 災害ボランティアの1日



※翌日以降も連続してボランティアに参加する人は、このサイクルを繰り返す。

# 10

## ボランティアの心構え

ボランティアに参加するに当たっての心構えを紹介します。

### ① 自己完結

被災地や被災者は、災害によって大きな負担を強いられています。災害ボランティアの作業や生活に必要なものは自分自身で準備し、持参するという「自己完結」の姿勢が大切です。

下の表は、ボランティアの持ちものの例ですが、内容は時期や場所によって変わります。被害が大きく発災から日が浅ければ、現地のお店やコンビニが営業しておらず現地調達が難しいかもしれません。電気や上下水道が復旧していなければ、さらに必要な持ちものが増えます。反対に被災規模が小さく発災時からある程度時間が経てば、支障なく現地調達できるばあいもあります。災害ボランティアへの参加を決めたら、現地の情報収集を心がけましょう。十分な情報が手に入らないばあいには、品目や量を少し多めに準備し、持参することをお勧めします。

#### ボランティア活動に参加するときの持ちもの（例）

作業（清掃のばあい）に必要なもの	生活に必要なもの	その他、役立つもの
長靴や安全長靴	水	常備薬
ヤッケなどの作業着	食料	健康保険証
ゴム手袋や革手袋	洗面道具、ウェットティッシュ	ボランティア保険証明書
防塵マスク	着替え	被災地周辺の地図
ヘルメット	寝袋などの寝具	携帯電話や充電器
ヘッドライト	現金	貴重品入れ (ウエストポーチなど)

ボランティア 1 人ひとりが持参するもの

(作業は水害による清掃のばあい)



※宿泊を伴うばあいは寝具などの生活に必要なものが増える

## ② 自己責任

被災地の医療機関は被災者の治療や診療で忙しく、大きな負担がかかっています。ボランティアのケガや病気、事故などでその負担を増やさないう、しっかりと予防や対策を考えておきましょう。

被災地は、ただでさえ瓦礫などのケガをしやすいものがある、たくさんのホコリが舞っていることがあります。「持病の悪化が心配」「体力に自信がない」などのばあいには、無理をせず参加を見送るという選択肢も持っておきましょう。また、誰でも加入できるボランティア保険には最寄りの社会福祉協議会で必ず加入しておきましょう。

災害ボランティアは、限られた時間のなかで、困っている被災者のために少しでも成果を出したいと、長時間がんばりすぎる傾向があります。慣れない環境、被災地という非日常のなかでは、自分が思っているより疲れがたまりやすいものです。集中力が落ちて、ケガや病気、事故につながれば、被災地の医療機関の負担を増やしてしまうだけでなく、作業を依頼した住民も辛い思いをします。最大限のセルフケアを心がけてください。

## ③ 被災地・被災者への配慮

家族や友人、自宅や家財、仕事や生きがいなど、被災者が災害によって失ったものはたくさんあります。また、津波後の塩害、避難所や仮設住宅での不便な暮らし、住まいや車の二重ローンなど、その災害によって新しく生まれた問題もあります。被災経験のないボランティアが被災者の状況をすべて理解することはたしかに難しいことですが、なるべく被災者の気持ちに配慮した言動を心がけましょう。

たとえば、「丸一日かけて必死に家の片付けをおこない、きれいになった」と喜ぶ気持ちはわかりますが、ピースサインをして写真を撮るボランティアの姿を見たとき、まだ生活再建のめどが立たない被災者はどんな気持ちになるのでしょうか？ 発災時からずっと張り詰めて努力してきた被災者にかかる「がんばってください！」という言葉の選び方は適切でしょうか？

ボランティアはプロフェッショナルではありません。悪気なく不適切な言

動やミスをしてしまうことがあるかもしれません。ミスは誰にだってありますが、できる限り、被災者が抱えている苦しさの背景を想像して寄り添う姿勢を持ちましょう。

## ④ 多様性の尊重

被災者といっても、その状況は一人ひとり異なります。地域特有の文化や風習、年齢や性別、考え方や価値観、被災状況や経験もさまざまです。特別なケアを必要とする災害時要配慮者も少なくありません。

また、一方のボランティア側も同じように多様な個人の集まりです。一緒にチームになったメンバーのなかには、初めてボランティアに参加する人もいれば、何度も活動経験のあるベテランもいます。年齢や性別、考え方の違いが気になることもあるでしょう。意見交換やコミュニケーションは積極的におこなうべきですが、ボランティア同士の言い争いや喧嘩は誰が見てもあまり気持ちのよいものではありません。

多様な人と考え方が集まる災害ボランティアの現場では、誰にとっても正しい対応、正解というものはないのかもしれませんが、「それもひとつの方法、考え方」と違いを認め、多様性を受け入れる姿勢が大切です。



# 11

## 活動内容と必要なもの

活動内容に適した服装や道具を選びましょう。

### ① 災害ボランティアの活動内容

災害ボランティアがおこなう活動内容は、被害状況や時期、参加する先の組織や団体によって異なります。また、活動が続けるあいだに変化することもあるでしょう。まずはこういった活動内容があるのか、代表的な例を見てみましょう。



炊き出しの調理や配布



泥出し・清掃



避難所の手伝い・運営サポート



支援物資の管理・配布



足湯をしながらの傾聴  
けいちょう



地域のお祭りや行事の手伝い

## ② 作業中の服装

作業内容によって、適した服装が変わります。炊き出しの調理であれば、帽子やマスク、ビニール手袋などの衛生管理に気をつけた服装で作業する必要がありますね。清掃、泥出し作業であれば、ケガを予防するために靴底に鉄板の入った安全靴、革製の手袋、防塵マスク、ヤッケ（防水の作業着・ジャンパー・パンツ）などが適しています。たくさん汗をかくことになるので、インナーには吸水性や速乾性のあるシャツ類が便利でしょう。安全靴や革手袋などの日常的にあまり使わないものは、大きなホームセンターや作業着屋で取り扱っています。

参加する先の組織や団体で、服や道具の一部を貸し出してくれるばあいもあります。ただ、中古だったりサイズが合わなかったりと、使い勝手が悪く感じることもあるので、自分に適した服や道具はやはり自分で選ぶのが一番です。

炊き出し用の服装



清掃活動用の服装



## ③ 作業用の資機材・備品

作業内容によって、使う道具が変わります。炊き出しの調理であれば、プロパンガスや大きな寸胴鍋すんどうなべといった家庭ではあまり使う機会のない大量調理用の資機材を扱うことになります。清掃、泥出し作業であれば、スコップや一輪車（通称ネコ）、高圧洗浄機といった資機材を使うこともあるでしょう。集めた泥や壊れた家財道具の破片などは、土のう袋に入れて災害廃棄物の処理に出すことがほとんどです。

作業用の資機材まで一人ひとりのボランティアが準備・持参することはあまりないと思いますが、きちんとした使い方を守らないと思わぬケガや事故につながります。ボランティアリーダーや経験者に確認してから使うようにしましょう。



## ④ 拠点の整備と後方支援

裏方としての災害ボランティアの作業を支えているのは、災害ボランティアセンターや参加する先の組織、団体などの現地拠点です。被災者からのニーズの聞き取り、ボランティアの受付やオリエンテーション、書類や資機材の管理、ケガ人の対応など、運営にはたくさんの人手が必要です。これらの現地災害ボランティア運営拠点でのお手伝いも、災害ボランティアの活動内容のひとつです。

また、NPO/NGO やその他支援団体では、被災地外にある本部事務所や支部で事務作業や支援物資の仕分け、街頭募金のためのボランティアを募集しているかもしれません。「何日も休みをとって遠方の被災地まで行くことができない」「現場で作業するには体力に自信がない」といった人は、ぜひこういった後方支援の活動も検討してみてください。

# 12

## 作業中のケガや病気に注意しよう！

注意が必要なケガや病気を紹介します。

### ① 作業前の安全確認

「貴重な時間を割いて被災地までやって来たのだから、1分1秒でも早く活動に参加したい」という気持ちはわからないではありません。ただ、きちんと現場の安全確認をした上で、作業に取り掛かるようにしましょう。

被災した建物のなかで作業するばあいには、まず周囲をぐるっと一周して安全確認をしてください。壁の深いヒビ、柱の傾き、屋根瓦や天井が落ちかかっているか、その建物が大丈夫でも隣の建物や裏側に危険がないかなど、実際に目で見て確認しましょう。「ボランティアが作業するには危険すぎる」と判断したら、いったん作業を中止して、リーダーや参加先の拠点に確認してみてください。



作業前には必ず安全確認をしてからなかに入ろう。

### ② 作業前の環境確認

建物の安全確認のほか、作業現場近くの環境についても確認しておきましょう。上下水道が復旧していない現場では、飲み水はどこで確保できるでしょうか？ 停電している地域であれば、自動販売機が動いていないかもしれません。また、トイレの場所も確認しておきたいですね。「さあ休憩だ！」となったときに、最寄りのトイレがそこから歩いて30分以上かかる場所だった、ということもありました。

また、被災地では二次災害に最大限に注意しましょう。地震の後には余震、豪雨の後には土砂災害など、二次災害が発生しやすいのが被災地の特徴です。作業中に警報が出たり、二次災害に直面したばあいにはボランティアはどこに避難するのか、作業前に確認しておきましょう。また、その情報をボランティアのチーム全員で共有しておくよう心がけてください。



作業場所でのトイレや水の確認



危険な箇所などをチームで共有



作業前に家の回りをぐるっと一周して安全確認

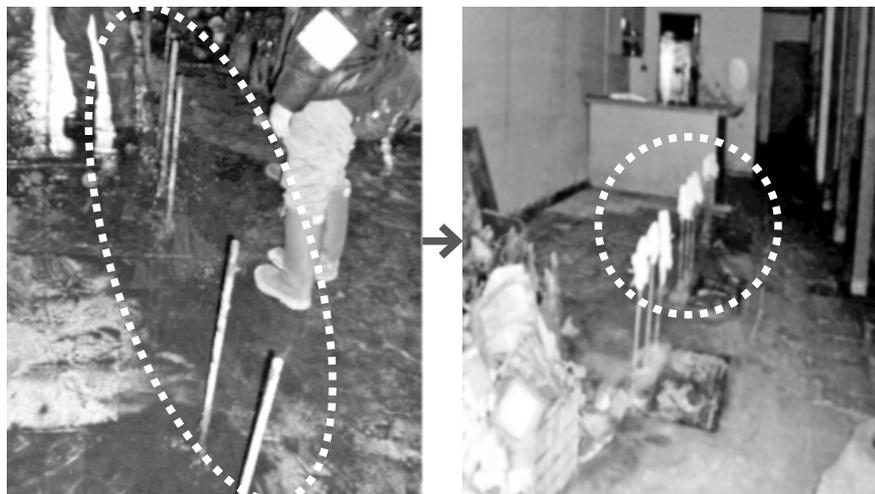
### ③ 作業中の工夫

ボランティアの手に負えない場所や作業内容については、作業を中止することも必要です。とはいえ、工夫次第でできる安全対策もありますのでご紹介します。

下の写真を見てください。泥水で浸水した施設の清掃作業をおこなったときの写真です。もともと大きなカウンターテーブルがあった場所ですが、テーブルが流されて鉄の杭がむき出しになっています。泥で足元が滑りやすく、作業中に転んでぶつかったらそれこそ大ケガをしてしまいます。

鉄の杭に気付いたボランティアの一人が持ち合わせていたタオルを巻いて、安全対策をおこないました。軍手を巻きつけたり、ペットボトルを反対向きにかぶせるなどの工夫も考えられますね。

このほか、割れたガラスが窓枠に残っている、看板や飾りが落ちそうになっている、床に穴が空いているなど、さまざまな危険が潜んでいます。危険なスペースには近づかないよう封鎖して作業したり、落ちてしまいそうなものを取り外してから作業するなど、安全対策を考えてみましょう。また、危険なところを発見したら、必ず一緒に作業しているボランティア全員と情報を共有することが大切です。



転ぶと危険な突起物

タオルを巻いて工夫した様子

### ④ 休憩の取り方

作業の合間に休憩するときも、そこが被災地だということを忘れないようにしましょう。夏場の汗をかく作業であれば、日陰を見つけて休憩するでしょう。しっかり身体を休めましょう。ただ、その日陰をつくっている建物自体が何らかの被害を受けているかもしれません。余震などで頭上から瓦や看板、窓ガラスなどが落ちてこない場所かどうか確認しましょう。

また、熱中症への対策もきちんとおこないましょう。2014年の広島土砂災害では、オリエンテーションで声を大にして「各自で熱中症対策をお願いします」と呼びかけていたにも関わらず、何度もボランティアが救急車で病院に搬送される姿を見ました。水分補給やこまめな休憩の目安は、チーム内で一番体力がない人に合わせるつもりで、十分すぎるほどがちょうどよいと考えておくべきです。



上の看板のネジがはずれていた。休憩場所の安全にも気をつけよう。